讃美歌学概論[1]

竹　内　　信

序　　言

昭和6年以来讃美歌（教会音楽）講習会において，「讃美歌学概論」が取り上げられたのは今回が始めてである。讃美歌の歴史や，ドイツ・コラールとか福音唱歌などの讃美歌の一部門についての解説とか，また個々の讃美歌作者についての研究などの，いわゆる各論的な講義はなされた。しかし，讃美歌研究が一つの独立した学問となるためには，讃美歌研究の全領域にわたる見通しを与える概論が必要である。

よく整った讃美歌学概論を講ずるに十分な準備が出来たわけではないが，讃美歌学の確立を希望するあまり，まず手をつけてみた。

この分野における文献は殆んどなく，僅かな欧米の Hymnologist の研究を参考にしながら研究して来たものである。問題の大にして重要なのに，自己の力の小なるに途方にくれるのみである。

ただ希望するのは，Hymnology 研究に熱意をもつ若いジェネレーションの人々が，私の研究を足場として更に深く研究を推進して，日本における讃美歌学の樹立に努力していただきたいということである。私の概論は，今後の研究者たちのための問題提起であり，研究方向の指向である。

1　1962年8月31日－9月1日　関西学院大学におけるキリスト教音楽講習会での講演

I　讃美歌学とは何か

1.　Hymnology の（語原的）意味は，ὕμνος + λόγος = The study of a hymn である。

2.　古くから讃美歌を指す言葉であった。讃美歌研究の意味で用いられた最初のものは，John Julian : Dictionary of Hymnology, 1892 である。

3.　Hymnologyは歌詞の研究であって，歌曲の研究は普通含めない。Julian, 上掲書を見よ。

4.　歌詞の研究を中心とすること。普通讃美歌の研究といえば，まず音楽を考える。讃美歌歌唱指導が讃美歌研究と考えられている。もちろん歌曲を軽視しない。しかし，歌詞が軽視されてはならない。音楽家は，先ず音楽があって次に歌詞があるように考えるが，讃美歌は本質的に歌詞が主で，歌曲は従。歌詞の暗誦と理解とを助けるために，歌曲が用いられるのである。

5.　広義の Hymnology には音楽も含められる。音楽を理解しなければ，その讃美歌は十分に理解されないからである。Hymnologist と Church Musicianとの密接な協力が必要である。

II　讃美歌とは何か

1　予備的注意

(1)　讃美歌か聖歌か

讃美歌は Hymn，聖歌は Sacred Song。常識として教会のうたは，讃美歌と一般に考えられるに至っている。

「古今聖歌集」「聖歌」を用いる人々のうちには，讃美歌なる用語を用いるのを好まない人もある。しかし，われわれは「讃美歌」を用いるから讃美歌を固守するのではなく，そうした分派的な動機でなく一般的な理解という点からこれを用いたい。しかし，聖歌を用いる人々の気持をも尊重したい。

(2)　非基督教的讃美歌の問題

讃美歌といえば，われわれはキリスト教会において用いられる基督教的讃美

歌を考えるが，後述の如く，讃美歌なる言葉が，ギリシャ語 ὕμνος の訳語とするなれば，この語はすでに古代ギリシャにおいて存在した。紀元前5世紀の悲劇詩人 Euripides などもたびたび用いている。単にギリシャのみならず，アッシリア，エジプトなどにも存在していた。この時代においては ὕμνος（讃美歌）は，神々や英雄たちをほめたたえ，祝祭や哀悼の場合のような重要な機会にたたえられるものであった。しかしわれわれは，こうした非キリスト教的讃美歌をわれわれの研究対象から除外したい。一般においても，原語は ὕμνος であっても，日本語においては，非キリスト教的なものは「讃歌」なる訳語を用いてキリスト教的讃美歌と区別している。

尚，キリスト教讃美歌でも洩れなくこれを含めることは，対象の範囲を甚だしく拡げることになるので，実際的な見地に立ち，われわれの使用する「讃美歌」に採用せられている讃美歌を中心にして研究を進めて行きたい。

2　讃美歌（Hymn）の意味

上述した如く，hymn はギリシャ語 ὕμνος から来ている。この語は，ὑμνέω =to sing の名詞形である。従って，ὕμνος は song と訳すべきものであるが，聖書においては，古いギリシャ的な使用に従って礼拝的な要素が加わり，一般的に言って「神を讃美して歌ううた」の意味に用いられている（Songs of praise to God)。

初代教会における讃美をあらわす特徴的な表現は，パウロ書簡に出て来る「詩と讃美と霊の歌」（エペソ5：19，コロサイ3：16）である。

「詩とさんびと霊の歌とをもって語り合い，主に向って心からさんびの歌をうたいなさい。」　エペソ 5：19

「詩とさんびと霊の歌とによって，感謝して心から神をほめたたえなさい。」　コロサイ 3：16

この詩 ψαλμός (psalm) と讃美 ὕμνος (hymn) と霊の歌 ᾠδή πνευματικός (spiritual song) がそれぞれいかなるものであったかを的確に知ることは，困難である。学者たちの説明がかなり相異しているからである。

Edward Dickinson : Music in the History of the Western Church,

1902, P.43 によると,

1 Psalms—The ancient Hebrew songs of the early Church.

2 Hymns taken from the Old Testament and not included in the psalter and since called canticles, such as the thanksgiving of Hannah, 1 Sam. 2:1-10

the song of Moses, Exodus 15:1-18

the Psalm of the three Children from the continuation of the Book of Daniel.

the vision of Habakkuk 1:1-3:19

3 Songs composed by the Christians themselves.

First appearance of Christian hymns.

Louis F. Benson: The Hymnody of the Christian Church, 1927 (1956), P.46 によると,

1 Psalms—Jewish-Christian psalm from Septuagint[2]

2 Hymns—Songs of direct praise to a God or hero,

—hymns offered to Christ as unto a God.

3 Spiritual odes—Songs of the Spiritual life.

この Benson の説は E. F. Scott (Moffatt N. T. Comm.) の説に基づくものであろう。

また, 金田義国：新約聖書に現われた原始教会の讃美歌, 基督教研究32巻, 2号参照。

さらに旧新約聖書神学辞典, 205ページ (深津文雄) によると,

詩 (プサルモス) はヘブル伝来のもの

霊のうた (オーデー　プニューマティケー) はギリシヤ風のもの

それに対し, さんび (ヒムノス) はキリスト教独自のもの

---

2 「各自はさんびを歌い」 Ⅰコリント 14：26；ψαλμὸν ἔχι＝to have a psalm「詩篇をもつ」, 旧約の詩篇そのままではなく, ユダヤ的キリスト教詩篇とでも言うべきもの

これら三つのものは，ハッキリと分けて考えられないということが暗示される。教会の讃美歌の三つの特色を示していると解すれば，原始教会の讃美歌の性質を知るに役立つ。

Ⅲ 讃美歌の定義

1 讃美歌研究における定義の必要

讃美歌の概念を明確にし，研究の範囲を限定する。また，讃美歌の特質を把握させて，讃美歌研究の方向をさし示すものである。

2 古典的定義——St. Augustine

(Aurelius Augustinus 354-430, 北アフリカ Hippo の主教)

Hymns are praises of God with singing, hymns are songs containing praises of God. If these be praise, and not praise of God, it is not a hymn. If these be praise, and praise of God, and it is not sung, it is not a hymn. It is necessary, therefore, if it be a hymn, that it have these three things, both praise, and praise of God and that it be sung.[3]

3 この定義の非妥当性

この Augustine の定義は立派なものである。そして，大多数の讃美歌にあてはまるものである。しかし，その用語の最も広い意味で取っても近代の讃美歌を定義するには不充分である場合がある。この定義にあてはまらないものが讃美歌でないならば，われわれの持つ偉大な讃美歌は除外されねばならない。

すべての讃美歌が讃美 (praise) でない。祈祷，悔改，執成，瞑想，すすめ，教え，激励，"Every feeling which enters into any act of true worship may fitly find expression in a hymn." (Canon John Ellerton, 讃43の作者)

また必ずしも神の讃美のみに限らない。たとえば，54「主の日の讃美」，213

3 Foot note which closes the second Book of Psalm.

「伝道者の讃美」, 372「勤労の讃美」。

4 近代的定義

讃美歌のもつ種々なる特質を考えながら，近代の Hymnologist は近代讃美歌を十分に表現する定義を下すことを試みた。その一つの例として，Harvey B. Marks (The Rise and Growth of English Hymnody, 1937) は，

"A hymn is a sacred poem expvessive of devotion, spiritual experience, or religious truth, fitted to be sung by an assembly of people." と言っている。

Benson (The Hymnody of the Christian Church, p.25) は，讃美歌中には Te Deum の様な韻文でないもの，また散文の詩篇等も含められるので，"poem" と言う語を避ける定義を作っている。

A Christian hymn therefore is a form of words appropriate to be sung or chanted in public devotions.

また Robert Guy McCutchan : Editor of The Methodist Hymnal, 1935 ; Our Hymnody, 1937 参照。さらに Hymns in the Lives of Men, 1945 p.27, "The present-day Protestant conception of the word "Hymn" —— The hymn is a relgious poem divided into stanzas which a congregation may sing by repeating the save tune to each stanza." これは descriptive definition である。

Carl F. Price[4]: The Story of Our Hymns, p.1 によれば，"A Christian hymn is a lyric Poem, reverently and devotionally conceived, which is designed to be sung and which expresses the worshipper's attitude toward God, or God's purposes in human life. It should be simple and metrical in form, genuinely emotional, poetic and literary in style, spiritual in quality, and in its ideas so direct and so immediately apparent as to unify a congregation while singing it."

---

4 First president of the Hymn Society of America

この定義は Normative である。ただに讃美歌の特質を示すだけでなく，すぐれた讃美歌はいかなるものでなければならぬかを指示している。

これらの定義に加えて自分の定義を述べようとは思わない。ただ以上の諸定義を通ずる重要な点を挙げて，讃美歌とはいかなるものであるかを検討したい。

Ⅳ 讃美歌の三要素

1 文学的要素

各定義を通じて明らかなことは，讃美歌が詩という文学的形式をもっているということである。Benson は詩ということばは避けたが，a form of words「言葉のある形」ということばを使って文学的特質を表わした。しかし，韻文でない讃美歌も無いとは言えないが，あってもごく僅かであろう。実際，讃美歌の大部分は歌唱せられるものであるので，metrical（韻律的）にならざるを得ない。単純な短かい（会衆によって歌唱されるため当然こうなるのだが）旋律によって歌唱せられるためにその詩型も単純なものとなり，Ballad[5]形式となる。

非常に教義的で客観的な場合もあるが，すぐれた讃美歌はやはり，根本的には Lyric 抒情的である。一般文学的分類に従えば，宗教的抒情詩というべきものであろう[6]。文学的評価の対象となる。しかし，一般的文学評価がそのままあてはまらない点に注意。

2 音楽的要素

讃美歌は最初から歌唱されるものであった。ὕμνος が song であることはすでに見た通りであるが，旧約の讃美歌である詩篇も Mizmor は A song with musical accompaniment であり，ψαλμός は song sung to harp であって

---

5 Ballad——素朴な用語と短かい Stanza で書かれた伝説民話を歌う詩

6 讃美歌の文学性の限界："A good hymn is the most difficult thing in the world to write. In a good hymn you have both the commonplace and poetical." Tennyson.

いずれにも音楽がは入っているのである。

讃美歌の魅力は大部分その音楽にある。われわれは讃美歌の音楽に非常な関心をもつ。これは正しい。しかし注意すべきことは，讃美歌は本来歌詞が主であったものである。歌曲はあくまで従で，歌詞をとなえ，これをおぼえるのに役立つために歌曲が付せられたものである。歌曲を重んずるはいい。しかし，歌詞以上に歌曲を重んじてはならない。

讃美歌の音楽は，その歌詞によって性格がきめられる。また讃美歌の礼拝歌であるということからも，その音楽は種々な制約を受けるであろう。

3　宗教的要素

文学的にすぐれており，音楽的に立派であっても，宗教的要素を欠くならば讃美歌はすぐれたものとならないことは言うまでもないことである。この点を高調するために，Augustine は神の讃美という言葉を使ったのである。われわれの讃美歌では直接に神を讃美し，神に歌いかけるものがなければならないということはないが，真実の意味における福音の真理がその根本におかれ，救われた者の切実な体験が反映するものでなければならない。ただ，神の名があるから宗教的だという様なものであってはならない。

V　すぐれた讃美歌の要件

讃美歌の定義を定め，それを本(もと)として讃美歌の要素を見出し，何が讃美歌を構成しているかを知るに至れば，すぐれた讃美歌とはいかなる要件をもたねばならぬものであるかが明らかになる訳である。われわれが，礼拝その他の場合に讃美歌を使用する際，よいうたを選び出すということをいつもしているのであるが，実際には，よい讃美歌が選ばれているとは限らない。それは，一つには，讃美歌をよく知っていないために選択の分野がせばめられていることと，二つには，正しい讃美歌批判の標準を確立していないことに依るものである。

讃美歌選択の標準は，ただ個人的好悪だけであってはならない。讃美歌学的知識によって基礎づけられた批判の基準が必要である。

よき讃美歌とはいかなるものであるかという問題に対して，Miller Patrick が I. Watts の讃美歌について述べているところを引用する（The Story of Church's Song, Scottish Ed. 1927, American Ed. 1962)。

"……he (Watts) set forever the example of what the congregational hymn should be. What made his own hymns so popular was their fidelity to Scripture, their consistent objectivity and freedom from introspection, and their exact suitability, in ideas and in the limpid clearness of their language, for qiving voice to the religious thought and emotion of the average believer ; these qualities make his best hymns perfect for the expression of a congregation's worship. He showed also that a good hymn for popular use should have a single theme, organic unity, boldness of attack in the opening line, and a definite progression of thought through out to a marked and decisive climax. Also, it should be short. His Hymns are brief, compact, direct, and telling. Reasons like these justified James Montgomery in saying that Watts was 'the real founder of English hymnody.'"

この叙述から，よい讃美歌とはいかなるものであるかという問題に対する答えを引き出すことが出来る。すなわち，

1　聖書への忠実さ

2　霊的現実性

3　単純性（表現と思想における）

4　構造的堅実性

である。

1　聖書への忠実さ Scriptural fidelity

キリスト教が聖書にもとづく福音である以上，讃美歌も聖書から離れてはならないことは言うまでもないことである。讃美歌の精神的背景は聖書である。

すぐれた讃美歌はみな聖書に即したものである。そして，讃美歌は聖書的真理を適切に表現するものであり，また聖書的真理である福音を最も有効に伝達するものである。讃美歌はキリスト教信仰を表現するものであるとともに，それを印象づけるものである。讃美歌の教育的作用 teaching function は，伝道のために無視してはならない大切な点である。

讃美歌と聖書との密接な関係を特によく示したのは， Albert E. Bailey : The Gospel in Hymns Backgrounds and Interpretations, 1952, New York である。

2　霊的現実性 Spiritual reality

すぐれた讃美歌には鮮明な宗教経験が息づいている。神学的に思想がよく歌われ，文学的によく整っていても，もし霊的現実感において欠けていたならば，すぐれた讃美歌とは言えない。

讃美歌は宗教的抒情詩であると言うが，表わされる感情は人間の個人的感情でなく，神との交わりにおいてたかめられる信仰的感動である。著名な讃美歌にはみなこれがあるが，日本語に翻訳される際，思想だけが表わされて，この現実感は移されていないことは残念なことである。まず，讃美歌作者が感動したものだけが，これを歌う人を感動させるのである。

3　単純性（簡潔性）

よい讃美歌は短くて，簡潔でなければならない。一般の詩において尊重される，ことさらに言わんとするところを隠喩 metaphor や類比 analogy でぼかして言うようなことは讃美歌では許されない。神の事実を単純な用語で簡潔に表現されているものが，歌うものに強い印象を与えてよい讃美歌とされるのである。

Watts の讃美歌中最もすぐれたものと見られているのは，O God, our help in ages past（讃 88，過ぎにし昔もきたる代々も）である。この讃美歌の特徴の一つは用語が単純であることである。5 節中 113 語があるが，そのうち21語だけが 2 シラブル（音節）以上の語である。3 シラブル以上の語は 4 語にす

ぎない。

Our God, our help in ages past
　　Our hope for years to come,
Be thou our guard when life shall last,
　　And our eternal home!

この最後の節は最も力に満ちた節といわれる部分であるが，その節で用いられている25語のうち2シラブル以上の語は ages と eternal の2語のみである。Benson はこのことを指摘して，偉大なものは常に単純であると述べているが， Watts が無学な大衆に与えるためにつとめて単純な用語を用いたことが，図らずも偉大なる讃美歌を生むに至ったことは意義深いことである。

ただに表現だけでなく，内容となる思想にしても讃美歌においては複雑なままでは効果を挙げにくいのであって，よく煮つめられた単純な形において示されているのがすぐれた讃美歌となっている。

4　堅 実 な 構 成

a singe theme, organic unity, boldness of attack in the opening line, and a definite progression of thought through out to a marked and decisive climax.

これらはみな，よい讃美歌の持つべき構造的要件である。一つの明確な主題があって，全歌を統一している。先ず初行からそれはハッキリと打ち出される。そしてそれは着実に進行して行き，クライマックスに達する。中だるみや道草を食うことがあってはならない。

初行にその歌の中心思想を力強く打ち出すのがよく見られる手法

260	Rock of ages, cleft for me	A. M. Toplady
142	When I survey the wondrous cross	I. Watts
98	Hark! the herald angels sing	C. Wesley
89	God moves in a mysterious way	W. Cowper

讃美歌は各定義に挙げられているように，会衆によって歌われる礼拝歌であ

る。反復して歌われる使用に耐えるものでなければならない。

162 All hail the power of Jesus' Name E. Perronet

（あまつみつかいよ，イェスの御名の）

このうたなど，歌詞を読むだけでは余りに単純と思われるが，大きな会衆によって歌われるとき驚くべき力を示す。

Ⅵ 讃美歌の種類

1 新約聖書の讃美歌
2 ギリシャ的讃美歌
3 ラテン語の讃美歌
4 ドイツ・コラール
5 詩 篇 歌
6 英国讃美歌
7 福 音 唱 歌
8 近代的讃美歌
9 日本の讃美歌

Ⅶ 新約聖書の讃美歌

1 詩 篇

「彼らはさんびを歌った後，オリブ山へ出かけて行った」マルコ14：26

普通過越節に歌われるハレル詩篇113—118。

113，114は食前，115—118は食後。この場合のは118篇であろう。十字架を前にして最も適切な詩篇。「神をさんびし，すべての人に好意を持たれた」行伝2：47，Ⅰコリント14：26。

2 詩篇で表現し得ない新しい信仰

(1) 詩篇の変形「おとめマリヤの頌」ルカ1：46—55，ザカリヤの歌ルカ1：68—79，シメオンの歌ルカ2：29—32

(2) パウロ書簡中の讃美歌の断片

エペソ5：14，Ⅰテモテ3：16，Ⅱテモテ2：11—13。

Ⅷ ギリシヤ的讃美歌

新約的讃美歌は歌いつがれていたであろうが，はじめ300年は迫害の時代であって，おおぴらに歌うことは許されず，発展もたどたどしかった。

313年 Emperor Constantine のミラノの勅令によってキリスト教が公認せられてからは，爆発的に歌声が上がった。教論の烈しい時代に讃美歌が争いのために使われたことは不幸なことであったが，讃美歌のもつ大きな影響力を示すことである。

この時代に Kyrie, Magnificat, Gloria Patri Sanctus, Te Deum 等の歌唱方式が確立したであろう。

讃35 ψῶς ἱλαρὸν ἁγίας δόξης

（とこしえの父より出ずる）

東方教会において讃美歌は非常にさかえ，多くの讃美歌作者が表われたが，そのうち讃美歌にその作品が収められているのは8，9世紀のものである。

375 見よ，むらがる悪の霊 Andrew of Crete

154 地よ，声高く告げ知らせよ John of Damascus

40 今日のひと日もいまは暮れぬ Anatolius

126 風はげしく波立ち 〃

70 父，み子，み霊の光の主よ Metrophanes

客観的，教理的であることが特徴。そのため類型化して凋落して行った。

Ⅸ 西方教会の讃美歌（Latin）

1 東方教会よりの導入

ヒラリウス（295—368）＋ アジア

2　Ambrosius (340—397)　Milanの主教

Arius 論争との戦いの間に，Empress Justina の攻撃中籠城。告白，中巻第7章104頁。讃27，37。

3　Gregorian Chant

Gregory the Great 540-604，既存のものの集大成，讃24，142，565。

4　137 Fortunatus　530-609

　　149　　〃

　　129　Theodulph d' Orleans　c. 821

5　Sequentia Notker (950 ca-1022)

　　(続誦)

書簡と福音書と間のアレルヤの終りにうたううた。

4大セリエンチア

- Victimae Paschali (復活節用)
- Veni Sancte Spiritus (ペンテコステ)　讃187
- Lauda Sion Salvatorem (聖餐式)　讃204
- Dies irae, dies illa (葬式)　讃176

Stabat Mates dolorosa (受難)　讃135

53　さかえあるいこいの日よ　Pierre Abélard, 1079-1142

136　血しおしたたる　Bernard de Clairvaux　c. 1150

347，353　Jesu dulcis memoria　〃

484　真玉(またま)しらたまこがねひかる　Bernard de Cluny　c. 1145

202　くすしきみすがた仰ぎつつ　Thomas Aquinas, 1227-74

350　わが主よ神よ　Francisco de Xavier, 1506-52

X　ドイツ・コラール

XI　詩　篇　歌